

ウイルスの影響か…！？

性欲が高まり抑えきれなくなっていく美女たち…！！

生物兵器事件

バ○オハザード2Re 異種姦CG集

DEEP RISING

生物兵器事件

CAUTION!

未成年の方の購入・閲覧を禁止します！
画像の無断転載・加工を禁止します！

Reprint is prohibited !

Prologue

「はあ…はあ…っ!？」

ラクーンシティの薄暗い路地裏を駆け抜けていく一人の女性…
その背後からは何体もの活性死者…ゾンビの姿があった

街中がゾンビで溢れ逃げ場もなく彷徨うのは
「クレア・レッドフィールド」

連絡の途絶えた兄「クリス」の身を案じ…
警官である彼が務めるこのラクーンシティまで足を運んできた…

クレア「あそこなら…少しは身を隠せる！」

クレアは偶然に扉が開いていた建物の中へと身を隠した…
暗闇に包まれた建物へと入るのは非常に危険であったが
動揺し混乱していたクレアには少し考える時間が必要であった

クレア「ああ、どうしてこんなことに…。」

街へと向かう途中で立ち寄ったガソリンスタンドで
初めて遭遇したゾンビ
最初は正体がわからず何かの悪戯かと思えた…
しかしそれが想像を超えた本物の怪物であることに気付き
恐怖で怯えていた時…
偶然にも同じ場所へと立ち寄ったラクーン市警の警官
「レオン」と出会い
この街で一体何が起きているのか…それを突き止めるために
警察署へと向かうことになった…

だが…街中は想像を超えた悪夢と化しておりゾンビで溢れていた
クレアとレオンは暴走してきたトラックの事故に巻き込まれ
離れ離れとなり、警察署での再会を約束して別れた…

レオンと出会い僅かな安心感を得られていたクレアだったが
一人になると途端に不安な気持ちになり恐怖が湧きだしてくる

僅かな暗闇でもそこに何かが潜んでいるように見え
気の休まる瞬間が無かった

クレア「……………はあ…どうやら…撒けたみたいね…。」

背後から迫っていたゾンビ達はクレアを見失ったらしく
新たな獲物を求めて彷徨いどこかへと消えていった

ひとまず危険が去りクレアは
ようやく僅かだが体を休める時間が取れた

クレア「ここは一体どこなの…街の状況が変わりすぎてて…。」

クレアは事前に用意していたラクーンシティの観光マップを
取り出し

自分がいる場所を確認しようとしていた
だが、裏路地をゾンビに追われて彷徨ったクレアには
今自分がどこにいるのかさえ解らず
警察署への道筋はまるで掴めなかった

クレア「な…なに…今の物音は…？」

暗闇に包まれた室内から聞こえてきた物音

クレアは咄嗟に護身用の銃を構え暗闇の方へと銃口を向けた
闇の向こうに何が潜んでいるのかわからない…
しかしそこには確実に何かがいる

危険だと判断したクレアは建物の外へと逃げ出そうとするが

クレア「！！？」

外の路地にもゾンビの姿があり逃げ場を失ってしまう…
物音を立てずに慎重に周囲の様子を伺うクレア…

クレア「…違う…ここにいるのはゾンビじゃない…！？」

暗闇の奥に潜んでいる何か…ゾンビだと思っていたその何かは
聞いたことの無い声で鳴き暗闇の中に僅かに見えた赤い肌…

クレアは得体の知らない怪物が潜んでいることを理解し
本能的に身を守るためにその場から逃げ出したのであった

室内から路地へと飛び出したクレア
勢いよく扉を閉めると
室内に潜んでいた何かが扉へと勢いよく扉へとぶつかり
強い衝撃がクレアの全身に響いた
だが…
恐怖に怯えていたクレアは
そこにゾンビがいることを忘れてしまっていた…

クレア「きゃあああああっ!？」

背後からゾンビに抱き着かれ悲鳴を上げてしまったクレア
引き離そうと必死に抵抗したが
ゾンビはクレアの体を凄まじい力で抱きかかえ離そうとしない

クレア「ひああっ…!？ なっ…なにっ!？」

このまま首筋を噛みちぎられるかと思っていたクレアだったが
ゾンビはクレアの耳元へ激しい息遣いで迫り
両手で強く乳房を揉み出してきたのであった

ゾンビはさらにクレアのパンツの中にまで手を伸ばし
下着の上から秘部を激しく愛撫してきた

クレア「うあああああっ!？」

まるでゾンビにレイプされているようなその異常な状況…
クレアの頭にふっと過去のニュースの事が思い浮かんだ

ラクーン山地で発生した猟奇事件…と
連続発生した女性のレイプ事件…
被害にあった女性は誰もが怪物に犯されたと語り

9月に入ってからラクーン市内でも同様の事件が多発していた
という…

被害者たちの恐怖から生まれた妄想だと報道され
クレア自身もそう思い込んでいた…だが
今自分が置かれている状況はまさにその一見と合致していた

クレア「そんなんっ…女性を襲う怪物のニュース…本当だったのっ!？」

今になって…兄クリスの
「ラクーンシティには絶対に近づくな…」という
最後の会話の意味がよく理解できた…

クレア「あああっ…!?!いやっ!!!!????」

ゾンビはクレアの衣服を引き裂きさらに激しくクレアの体を
攻め立てた

全身を大きく震わせ悶えるクレア…
ゾンビは激しく本能的に秘部を愛撫し続け
クレアの秘部からは大量の愛液が溢れ出す…

クレア「…あああっ!?!…怪物にこんなことされるなんて…!」

必死に抵抗を続けながら…愛撫され喘ぎ続けるクレア
その表情にも疲れの色が見え始めていた…

クレア「あああ!?!待ってっそれはっ!!!!」

ゾンビは突然激しく腰を振り出しはじめた
混乱していたクレアはそれが何か理解できなかったが
自分の秘部に押しあたる固い物体の存在に気付くと
状況を理解しその顔は一気に青ざめていった

クレア「無理よっ、ゾンビとなんて…できるわけっ…
うあああっ!?!」



クレアの膣内にゾンビの肉棒が根元まで挿入されていった

クレア「うっ…あああああっ! ???」

苦痛に顔を歪めるクレア…
その瞳からは大粒の涙が零れ落ちていた

ゾンビは激しく腰を振りクレアの体を揺さぶり続けた

クレア「あっ…ああああっ!!!!!! ???」

休むことなく動き続けるゾンビ…
クレアはその攻めに歯を食いしばり耐えていたが
肉棒が与える快樂は…人間のものと変わらない

クレア「くっ…ゾンビに犯されるなんて…こんなこと…!!」

強い意志を持ち必死に激しいセックスに耐えるクレア
肉棒が与える快楽に思わず喘いでしまいそうになるが…
相手がゾンビであると自分に言い聞かせ必死に耐える

クレア「違う…感じてなんていないっ…早く…逃げないと…！」

このままでは永遠に犯され続けることになる…
クレアは諦めず逃げ出すチャンスを探っていた

クレア「ああっ…うそでしょっ…まさか…中に出す気なのっ!？」

ゾンビの息が荒くなり腰使いが一層強くなる
このままでは中に出されてしまうと恐怖を感じたクレアは
必死に暴れまわるがゾンビは決して離そうとはしなかった

クレア「あっ…うそ…中にっ…ああああっ!!!!？」



激しく脈打ち、クレアの膣内に射精するゾンビ
クレアは絶望した表情で涙を流し…
怪物に弄ばれたことを嘆いていた…しかし

射精を終えたばかりのゾンビは体が硬直し
クレアを押さえつけていた力も緩み逃げ出す絶好の機会であった

泣きじゃくっていたクレアだったが
そのチャンスを逃さず乳房を丸出しにしたまま
ゾンビの手から逃れて走り出していった

クレア「はあ…はあ…はあ…っ！！！！？」

路地裏を全力で走り続けたクレア…
どこに向かっているのかもわからずただひたすら逃げ続ける

そして偶然彼女の目に留まったのは…
ドアが開いたまま放置されている一台の車…
クレアは咄嗟に車の後部座席に飛び込みドアを勢いよく閉めた

クレア「はあ…はあ…まさか…こんなことになるなんて…。」

クレアの秘部からは射精されたばかりのゾンビの精液が溢れ出していた

自分の置かれた状況に絶望すると同時に
兄クリスやレオンのことを思い浮かべ苦しむクレア…

クレア「こんなことで…挫けちゃダメよ……早く兄を見つけて…
レオンと一緒に街から脱出する…。」

必死に自分を鼓舞するクレアだったが…
その車の中にいるもう一人の存在に気付いていなかった

クレア「なんでっ…うそでしょっ…！！？」

車の助手席に身を潜めていたゾンビが動き出し…
クレアを求めて後部座席へと身を乗り出してきたのであった

クレアは必死にゾンビを蹴ろうとしたが…
僅かな打撃ではゾンビはひるむことなく…
再びゾンビがクレアの体へと密着してきたのであった

クレア「いやああああっ!!!!?? もうだめ…やめて!!!」



既にゾンビに引き裂かれ丸出しとなっていた秘部に
新たなゾンビはすぐに肉棒を挿入し激しく腰を振り始めた

クレア「ああああああっ!!!!????だめえええっ!!!!!!」

その激しい腰使いに車両が大きく揺れ動き
クレアの乳房も弧を描くように揺れる
激しくぶつかり合う肌とクレアの喘ぎ声が
リズム良く車内に響きクレアの感覚は
次第にマヒしていくようだった

クレア「あああああっ…だめ…もう…耐え切れないっ…！！」

犯された直後…また新たなゾンビに激しく犯され
クレアの肉体は限界に達しようとしていた

クレア「あっ…あああああああっ！！！！??」

ゾンビに犯される車内で激しく潮を噴き上げてしまったクレア
全身をビクビクと痙攣させ悶える…

本能的にただクレアを犯し続けるゾンビ
そこには罪の意識もなく
どれだけ抵抗しようとも痛みさえ感じなくなった体には
全てが無意味であった…

クレアは次第に抵抗する気力を失い
ただゾンビに犯され体を揺さぶられるだけとなっていた

クレア「あああああっ…だめ…もう中には…出さないでっ…！！」

ゾンビのうめき声と共に大量に射精された精液…

クレアの膣内に溢れる熱い精液に悶え喘ぐクレア…

クレア「うあああああっ！また…私の中に…っ…！！？」

溢れる精液はクレアの膣内に収まりきらず
肉棒が引き抜かれると大量の精液が彼女の全身へと降りかかった

クレア「…あっ…あああっ……。」



うああああっ!!
また中に…出てる…
ダメ…こんなに…出されたら…
妊娠しちゃう…

精液を浴び放心したまま全身を震わせるクレア…

車内から見える窓の外には…R.P.D.の文字が見えていた…

Episode 01

車内の窓から見えたR.P.D.の文字がクレアに希望と力を与えた

ゾンビに激しく犯されながらもクレアは必死にドアを開き
車両の外へと逃れると…

精液塗れのままR.P.D.の文字を頼りによろめきながらも
走り出したのであった

クレア「はあ…はあ…はあ…無事に…辿り着けた…みたい。」

辿り着いた場所は警察署の中庭…

そこにはいくつもの穴が掘られ十字に結ばれた木がいくつも
建てられていた

クレア「……………」

その光景に思わず言葉を失ったクレア…

柵の向こうにはクレアを襲ったゾンビの姿があり
クレアの体を求めて必死に手を伸ばしていた

目の前にある犠牲になった人々の墓を目にしたクレアは
犯されるだけで済んだ自分はまだ幸運だったのかもしれないと
考えさせられた…

クレア「…とにかく…兄さんとレオンを探さないと…。」

目の前に広がる絶望的な状況を見ながらも
クレアは兄クリスが無事であることに確信を持っていた
市警の特殊部隊員である兄クリスは
いくつもの事件と危機を乗り越えてきたエリートであり
どんな状況でも生き抜く能力を持っていることを
よく理解していたからだ

数か月前に大きな事件に巻き込まれ
部隊の他の隊員の多くが犠牲になったが
兄クリスは無事に生還したとの噂も耳にしていた

そんな兄ならば今も無事にいるはず…

クレアは全身に染みついた精液を雨で洗い流すと
警察署の内部へとゆっくりと足を踏み入れていった…

クレア「…よかった、生存者がいたのね！！」

???「……。」

警察署に入りすぐに遭遇したのは
コートを纏った一人の女性であった

???「まだこんなところに人がいるなんて…。
すぐに街から出たほうがいいわ…。」

クレア「そういうあなたも逃げないと…一緒に行きましょう
私は兄さんを見つけたらすぐに街を出るつもりよ

???「…お兄さんの名前は？」

クレア「クリス…。」

???「ああ…噂の…彼はこの街にいないはず
ヨーロッパのどこかに向かったと聞いているわ。」

クレア「えっ…どうして知っているの？
あなたは兄の友達か…同僚？」

???「そのどちらでもないわ…
忠告しておくけど…この街にいる怪物たちはただ人間を
襲うだけじゃない…もっと過激なことをしてくる…
女の子一人じゃ危険よ…
まあ、身をもって理解していると思うけど…？」

クレア「!??」

クレアの引き裂かれた衣服を見て謎の女性は
クレアに起きたことを察しているようであった

兄のことをよく知っているような口ぶりの女性…
だが友人でも同僚でもないと言う
その怪しげな女性に対し強く警戒しはじめるクレア

クレア「待ちなさいっ…あなたは一体だれ…何者なの…！！？」

エイダ「名前はエイダよ…今はそれで十分でしょ？」

クレア「待って…あなたも一緒に行動したほうが…安全…。」

立ち去ろうとするエイダを追うと…
すぐにその姿を見失ってしまったクレア…

クレア「何者なの…何かを知っているみたいだったけど…。」

クレアは謎の女性エイダの後を追って警察署内を探索しはじめる
署内のあちこちには激しく争った痕跡が残されており
ゾンビとの激しい闘いが起きたことを想像させられた

しかし…署内で生存者は確認できず遭遇するのは
ゾンビと化したかつての警官や市民たちばかりであった

クレアは捜索中に手に入れたグレネードランチャーを手に
ゾンビと戦いながら署内を進んでいく…

犯された苦い経験からかクレアは
容赦なくゾンビに銃弾を撃ち込んでいった

クレア「もうあんな目に合うのは嫌よ…容赦しないわ。」

ゾンビを見るクレアの目には怒りが込められていた
しかし…警察署の中に潜んでいるのはゾンビだけではなく

敵はゾンビだけと決めつけていたクレアは
それが天井に潜んでいることに気付くことはなかった…

クレア「きゃあっ！？」

突然、何かがクレアの腕に巻き付いた…

クレア「な…なによこれっ!？」

クレアは腕に巻き付いた長い物体を必死に振り払おうとした…
しかし、その長い物体の先には得体のしれない怪物が潜んでいた

クレア「な…なんなの…こいつ…!？」

ゾンビとは全く違う赤く染まった体に剥き出しとなった脳…
見るだけで恐怖で震えあがるような怪物が
天井に張り付いていたのだった…

クレア「きゃああっ!？なに…まさかこいつもっ!？」

警察署の職員により名付けられた怪物「リッカー」は
クレアの体へと舌を伸ばしその感触を確かめるように
全身を舐め回してきたのであった

クレア「ひいっ…いや、気持ち悪いっ…そんな…舐めないでっ!!」

さらにリッカーは引き裂かれた衣服の隙間からクレアの下着の
中へと舌を入り込ませ…

クレア「ひああああっ!!???そこはっ!？」



いやああっ!!
何なのこれはっ!!
ダメっ!!奥まで入ってきてるっ!!
そんなに激しくされたら!!ああっ!!

クレアの秘部へとリッカーの舌は辿り着き
ぐしょぐしょに濡れた秘部を確かめるように舐め回し始めた

クレア「うあああっ!!?そんな…奥まで入ってきたあっ!!!」

リッカーの舌は溢れる愛液が気に入ったのか…
クレアの秘部の中にまで入り込み激しく膣内を舐め回し始めた

全身の自由を奪われたまま激しく膣内を刺激されるクレア…
ゾンビに犯されて間もないためか…
クレアは満足に抵抗するだけの体力はなく
リッカーの成すまま弄ばれていた

クレア「あっ…ああああ…もういや…許してっ…！！」

リッカーは決して攻めを緩めることはなかった

クレア「ひいっ…！？な…なにをっ！？」

天井に張り付いていたリッカーは
ゆっくりと壁伝いにクレアへと近づいていき…
覆いかぶさるようにクレアの背後から密着してきたのであった

クレア「ああ…うそ…もしかして…また私を…っ！？」

密着してきたリッカーの股間からは極太の肉棒が反り立ち
クレアの秘部に向かい迫っていた…

クレア「ひあああああああっ！！！！」

極太の肉棒が容赦なくクレアの膣内へと一気に挿入されていった

リッカーは鋭い爪を壁に食い込ませ体を固定すると
激しい勢いで体を揺さぶりクレアとの交尾を開始した

クレア「あがっ…ああああああっ！！！！」



なっ…なんなのコイツっ!!
ああっ!!
そんないきなり挿れるなんて…っ
ダメ…激しすぎてっ…!!

その激しさはゾンビに犯されたときの比ではなかった

あまりの激しさにクレアは抵抗することもできず
必死に耐えることしかできない
同時に襲い掛かる激しい苦痛に顔を歪めていた

クレア「あっ…激しすぎて…あ” ああああああ” っ!!!!!!」

歯を食いしばり必死に耐えるクレアだったが
その口元からは唾液が溢れ流れ落ちる

苦痛だった肉棒の感覚の中に
僅かだが感じられた快樂…

次第に快樂は強くなり激しい交尾が
快感に感じられるようになっていくクレア…

クレア「あはあああああっ！！！！？」

涙を流しながら喘ぐクレア…
怪物に犯されることに快樂を感じ始め
混乱している彼女の感情は自分でも整理できず
頭の中は真っ白になっていた

クレア「ああああああダメえ、中に…中に出てるうっ！！！！？」



リックカーの雄叫びと共に溢れる大量の精液…
クレアの膣内へと溢れる精液をは
彼女の腹部を大きく膨らませていた…

大量に射精されぐったりと意識朦朧となるクレア
リックカーは彼女を解放することなくさらに腰をふり
交尾を続けていた

そんなクレアの様子をじっと見つめる監視カメラ…
署内のパソコンからその様子を見つめていたのは…
謎の女「エイダ」であった…

エイダ「……彼女には気の毒だったけど…
貴重なデータを回収できたわ…。」

エイダはクレアがリックカーに犯される様子を収録した
データをPCから回収した…

エイダ「助けに行ってあげたいけど…大丈夫…
交尾が終われば解放してくれるはずよ。
それより…
予定より早くタイラントが送り込まれたみたいね、
私もぐずぐずしてられない…。」

アンブレラが目撃者の始末の為に送り込んだ生物兵器が
既に署内をうろついていると情報を得たエイダは
すぐにでも極秘の研究施設へと向かう必要があった…

しかし、研究所へと続く地下道は封鎖されており
エイダは市内の下水道から枝分かれした研究所へと続く道
を見つけ出さなければならなかった…

エイダ「……やはり地下駐車場も封鎖されてるわね…。」

地下駐車場から脱出し下水道から
研究所を目指すことを計画していたエイダだったが…

エイダ「カードキーが必要ね…簡単にはいかないと思っていたけど…。」

警察署は地上も地下も完全に封鎖されており脱出するためには
署員が持つカードキーが必要であった…

いかにしてカードキーを入手するかを考えていたとき…

エイダ「!??」

背後から聞こえた物音に反応し銃を取り出し構えたエイダ

エイダの耳元に聞こえる複数の足音…
暗闇の中にゾンビではない何かが複数潜んでいるようであった

エイダ「えっ…こいつはっ!??」

暗闇の中から姿を見せたのはウイルスに感染しゾンビ化した
警察犬…

生物兵器として調整された「ケルベロス」ではなく
ウイルスの二次感染により生まれたゾンビ犬であった…
生物兵器ではないとはいえ元は警察犬であることを考えれば
決して油断できない相手であった…

エイダは暗闇に潜むもう一匹に警戒しながら向かってくる
ゾンビ犬に向かい引き金を引いた…
数発が急所に命中するが…
その程度でゾンビ犬が活動を止めることはない

エイダ「さすがにタフね…。」

ゾンビ犬のしぶとさを見てもエイダの表情には余裕があった
暗闇からさらに一匹…ゾンビ犬が現れエイダの前に立ちふさがっても
その表情は変わらず、余裕で迎え撃とうとしていた…だが

エイダ「きゃあっ!？」

背中に突然大きな衝撃が走り倒れ込んだエイダ…
放置された警察車両の中に潜んでいた
3匹目のゾンビ犬がエイダへと飛びかかってきたのだ

そのままエイダのコートへと噛みつくゾンビ犬…
エイダは咄嗟にコートを脱ぎ捨て体勢を立て直そうとしたが
他のゾンビ犬がエイダの間隙を見て飛びかかり
エイダの上に覆いかぶさってしまったのだ

しかもゾンビ犬は激しく腰を振り始め…
エイダを相手に発情しているようであった

エイダ「いやっ…この姿勢って…まさかっ…!？」

ゾンビ犬は完全にエイダを交尾相手として見ており
決して逃がそうとはしなかった

エイダ「そんなんっ…まさか犬となんてっ…!!??」

下着の上から激しく肉棒を擦りつけてくるゾンビ犬…
秘部を刺激され次第にエイダの下着にうっすらと染みが浮き上がる…

エイダ「うそ…いやっ…脱がさないでっ…そんな…どうやって…!？」

ゾンビ犬は邪魔な下着を器用に足でズリ下ろしていき
他の2匹のゾンビ犬が啞え一気に下着を引き下ろし…
エイダの秘部は完全に露出してしまった
常にクールなエイダも焦り動揺を隠せない…

エイダ「ま…まってっ…うっあああ!???入ってきたっ!？」



肉棒がエイダの膣内へと挿入すると…
ゾンビ犬は激しく腰を振り出しエイダとの交尾を開始した

エイダ「うっああああっ…!!? こ…こんなことって…!?!?」

激しく膣内を刺激する肉棒…
動揺しながらもエイダは必死に自分を落ち着かせ冷静さを
取り戻そうとしていた
だが…

エイダ「うっ…あぐっ!?!?!?」

激しい腰使いに全身が敏感に反応してしまうエイダ…
秘部からは愛液が止まることなく溢れ続ける…

スパイとして敵の捕虜になった時の為の訓練はしてきた…
苦痛…そして辱めに耐えることはなど容易いはずだった…

だが、本能的で野性的な交尾…相手が人間ではないという
特殊な状況がエイダの感覚を乱し狂わせていた

エイダ「ああああっ…ダメっ！そんな激しいのっ…！！！」

経験したことの無い快楽を前にエイダの気持ちは高ぶっていく…

エイダ「ああああ…！？！？？ イ…イクっ…！？！？？」



ゾンビ犬に襲われ激しく潮を噴き上げたエイダ…
犬相手にイカされるなど屈辱的であったが…
こんなにも快樂を感じたのはひさしぶりのことであった…

エイダ「ああ…私…どうなっちゃうの…っ…ううっ！！」

それでもゾンビ犬は交尾を休みなく続け
エイダの体を揺さぶり続けていた…

そしてついに…ゾンビ犬の鼻息が荒くなり全身が震え…
大量の精液がエイダの子宮めがけて射精されたのだった

エイダ「ああああっ…出てるっ…熱い…私の中にっ…！！！！？」

エイダ「うっ…あがっ…ああ…っ…！！？」

精液を秘部から垂れ流しながら放心するエイダ…
彼女の周囲には交尾の順番が待ちきれない様子のゾンビ犬が
まだ2匹…

エイダが彼らから解放されるのはしばらく後の事となる…

Episode 02

クレア「はぁ…ひどい目にあった…」

リッカーに散々弄ばれたクレアはかなり疲れきった表情で
S.T.A.R.S.のオフィスで座り込んでいた

兄クリスのデスクには…S.T.A.R.S.の仲間たちへ宛てた手紙が
残されており
その中に妹クレアを気遣う一文が記されていた…

クレア「なんだかクリスらしくないわね……。」

両親を亡くしてから兄妹二人で生きてきた…
兄の事ならば誰よりもよく知っている自信があったが
手紙の文面はまるで別人が書いたかのような気がするほど
クリスらしくないものであった

クレア「仲間たちにだけ解る暗号みたい…
この数か月の間に何があったの…。」

兄が巻き込まれたという謎の事件…
それをきっかけに何かが大きく変わってしまったようであった
そして何としても兄と再会したいという想いが強くなると同時に
生きてこの街から脱出するという決意が改めて湧き起きる

S.T.A.R.S.のオフィスには大型の無線機が設置され外部と
連絡が取れるかと思われたが
無線装置は何者かの手により破壊され機能せず
雑音がただ流れるだけであった

クレア「…もう十分休んだわ…そろそろ出発しなきゃ…」

クレアはS.T.A.R.S.のオフィスに残されていた物資の中から
ジルが残したものと思われる衣服を拝借し
引き裂かれた衣装から着替え再び歩き出した…

バリケードでふさがれた署内は地図を持っていても
迷うほど複雑に入り組んでおり…
クレアは迷いながらもゾンビを退治し…
さらに奥へと進んでいった…

クレア「ここにもゾンビがっ…！」

???「ま…待て…ゾンビじゃないぞっ…！」

クレア「えっ…ごめんなさい…！でもよかった…
他にも生存者がいたのね…！」

図書室を抜け警察署ホールへと戻ってきたクレア…
そこには先程は無かった
警官…「マービン」の姿があった

マービン「…クリスの妹か…それは残念だったな…
クリスの奴は休暇を取ってヨーロッパに向かったはず。」

クレア「えっ…やっぱり兄はいないのね…。」

唯一の生存者であった警官のマービンは
クレアに兄クリスがここにいないことを教えた
クレアはエイダが語った言葉が嘘でないことを知り
彼女の事をより警戒する気持ちが強くなる

マービン「それより…新人のレオンが脱出のために地下に向かっ
たばかりだ…お前も後を追うんだ。」

クレア「…だけど…あなたはどうするの？」

マービン「……………わかるだろ…お前たちは必ず脱出するんだ…。」

クレア「……………わかった…必ず脱出してあなたのことを兄に伝えるわ…。」

マービン「…ああ…頼むぞ。」

クレアの目から見てもマービンが衰弱しきっており
助からないことは理解できた…

先に地下へと向かったというレオンも
マービンの覚悟を理解したのであろう…

クレアもまたレオンと同じように胸の苦しみを抱え
地下への階段をゆっくりと降りていったのだった…

クレア「こんな場所に地下への階段があるなんて…
元は美術館らしいけど…それでも変よね…。」

ラクーン警察署は美術館を改装したものと
パンフレットに載っていたが、
それだけでは説明できないような不思議な仕掛けが
あちこちに残されているようだった…

クレアはエレベーターへと乗り込みさらに地下へと潜っていく

クレア「…一体どこへ続いているのかしら…？」

薄暗い地下道をゆっくりと警戒しつつ進むクレア…

すると…

すぐ近くを走る何者かの足音が周囲に響き渡る…

クレア「…誰かいるのっ!？」

クレアの声に答えることなくその足跡はどこかへと消えていった

クレア「今のは…女の子のように見えたけど…?。」

僅かな隙間から少女を見たクレア…

しかし…

その後を追うように…ずっと大きな足音が振動を伝えながら
走り去っていった…

クレア「誰かが…あの子追われているの？」

クレアは警戒しつつ足跡が向かった方角へと向かい歩き出した

通路はパイプや機械が並んだ広い空間へと繋がっていた

クレア「足跡はこっちに向かったはずなんだけど…？」

慎重にゾンビやリッカーを警戒し足を進めるクレア…
すると…

クレア「!??」

レオン「!??」

クレア「レオンッ…!??」

レオン「クレア…無事だったかっ！」

地下でレオンと再会したクレア…
幸いにも怪我はなく無事な様子であった…

クレア「無事でよかったわレオン。」

レオン「ああ、クレアこそ…ここは想像よりずっと危険だ…
すぐに脱出したほうがいい。」

クレア「ええ、そうね…
それより女の子を見かけなかった？
こっちへ向かったはずなんだけど。」

レオン「女の子…か…見てないな、
クレアはエイダという女性を見なかったか？」

エイダという名前に心当たりがあるクレア…
どこか怪しい雰囲気を持つ彼女のことが信用しきれない

クレア「会ったわよ…警察署に入ってすぐだったかな…
1時間以上も前だけど…。」

レオン「そうか…無事だといいいんだが…。」

クレア「……ねえ…彼女どこか怪しくなかった…？」

レオン「怪しい…と言われれば怪しいかもしれないな、
彼女はFBI捜査官でこの事件の捜査をしているんだ。」

クレア「FBI…！？ そんなこと一言も…。」

FBI捜査官という素性に疑問を抱くクレア…

クレアが感じたエイダの印象はとても捜査官と思えるものではなかった
彼女と出会った時も、どこか観察されているようであり
非常に居心地が悪いものであった

レオン「とにかく…生存者はもう俺たちだけだ…

おれはエイダを…君はその女の子を見つけて
地下駐車場に集合だ、そこから脱出する…。」

クレア「ええ、わかったわ…。」

エイダの正体についてはどこか納得できないクレアだったが…
残された僅かな生存者であることに間違いはなかった
ひとまず素性のことは忘れ協力し合うことが大事であると
自分を納得させ
見失った少女の搜索を再開した

クレア「おかしいわね…一体どこに……………えっ…？」

少女を探していたクレアは
倒れた棚の背後に隠れている小さな影に気付いたのだった

クレア「…あなた…大丈夫？ 怪我はない？」

クレアが明かりで照らすと…

綺麗な金髪の10歳くらいの少女がこちらに顔を見せた

クレア「大丈夫…私はクレアよ…一緒にここから脱出しましょう？」

???'「…………。」

少女は戸惑った様子ながらもクレアの差し出した手を取り
ゆっくりと立ち上がりクレアの元へと歩み寄ってきた

クレア「あなた名前は…？」

シェリー「シェリー…。」

クレアはシェリーを安全な場所まで連れそこでゆっくりと
彼女の話しに耳を傾けた

シェリーの両親はアンブレラの研究所で働いており
普段全く家に帰らず、シェリーとは
何日も顔を合わせないことも多いという…
しかし、母親から研究所で事故が起きたという連絡があり
警察署へ避難するようにと指示があったため
シェリーは一人で警察署までやってきた…しかし
シェリーが到着した頃は既に警察署は大混乱に陥っていた
ゾンビの襲撃と共に多くの犠牲者が出た為、
怯えたシェリーは地下へと逃げ今まで隠れていたという…

シェリー「だけど…少し前から何かが私の後を追いかけてきて…。」

クレア「…さっきも何かに追われていたわよね…一体何者かしら？」

怯えるシェリーをぐっと抱きしめたクレア

クレア「大丈夫よ、私とレオンが守ってあげるからね。」

シェリー「レオンって…？」

クレア「ここの頼りになる警官よ、
今は他の生存者を探しに行ってるけどすぐ戻ってくるわ。」

シェリーを力強い言葉で励ますクレアだったが
彼女自身も不安で押しつぶされそうなほど追い詰められていた

何度も体を弄ばれた自分が果たしてこの少女を守り切れるのか…
常人であれば耐え切れないほどの重荷であろうが…
クレアはそれを背負いながらも明るく振る舞い
決してシェリーを不安にさせるようなことはしなかった…

エイダ「あれが…噂のアネットとウィリアムの娘ね…。」

クレアと行動を共にするシェリーを見つめるエイダ…
ゾンビ犬3匹に散々弄ばれたエイダだったが…
持ち前の精神力で短時間で立ち治っていた…

エイダ「両親が行った悪夢の実験のせいで…

あの子には二度と平穏な生活が訪れないかもしれないわね…。」

シェリーの両親であるウィリアムとアネット夫妻が生み出した
G-ウイルス…

その発明のせいで、この街から無事に脱出したとしても
シェリーには厳しい監視生活が待ち受けていることを
エイダは理解していたのだ

親の犯した罪により、何の罪もない子が苦しむことになる…
シェリーを見つめるエイダの心境は複雑であった…

クレアと出会い少し安心したのかシェリーの表情も少し
穏やかになっていった…しかし…
二人の前に想像を超えた怪物が立ちふさがった…

突然、天井を突き破り姿を現したのは…

目玉の付いた巨大な左手を振り回し暴れる怪物…

それは警察署で遭遇したどの怪物とも違う異様な姿をしていた

クレア「シェリー逃げてっ！！」

シェリー「…パパ…？」

クレア「えっ！？」

シェリーの言葉に耳を疑うクレア

エイダ「…!?まさか…あれがウィリアム…かなりマズイ状況ね。」

シェリーの言葉とその反応から目の前にいる怪物が彼女の父親であることは間違いなかった…

そして理由は解らなかったが、目の前の怪物は娘であるシェリーを狙っていた…

クレア「シェリー危ないっ！？」

シェリー「クレアッ！？」

シェリーと怪物の間に咄嗟に入り込み彼女の代わりに怪物に捕まってしまったクレア…

シェリー「パパ…やめてっ！！」

シェリーは必死に父親に呼び掛けた…がその声は怪物となった父親には届かない…

エイダ「仕方ないわね……。」

シェリー「きゃあっ！？」

エイダは軽い身のこなしでシェリーの元へと駆け寄ると彼女の手を引き下水道へと続く扉の奥へと彼女を隠した

エイダ「クレアを助けてくるから…ここでじっとしているのよ？」

シェリー「……う…うんっ…。」

突然のエイダの登場に驚き目を丸くしていたシェリーだった
自分の身代わりとなったクレアのことを心配でたまらなかったが
目の前に現れた父親に似た怪物のことで頭がいっぱいになり
混乱と恐怖で動くことができなくなっていた

クレア「あああああっ！？離しなさいっ…！！！」

Gに囚われ必死に逃げようとするクレア…
だがGはクレアを決して離そうとはしない…

G第一形態「シェ…リーい…。」

僅かに聞き取れる声で…たしかに怪物はシェリーと言った
やはりこの怪物がシェリーの父親であることは間違いないのか…
複雑な心境になるクレアだったが…
怪物は…クレアの前で自らパンツを下ろし…反り立った肉棒を
露出させたのであった

クレア「えええっ！？こいつも…っ…！？？」

Gウィリアムは捕らえたクレアを
シェリーだと勘違いしているらしく
繁殖に相応しいもっとも遺伝子の近い存在に
胚を植え付けようとしていた

クレア「まって…そんな…今までで一番大きいっ…！？」

クレアが目に入ったウィリアムの肉棒は
G-ウィルスの影響か…想像を超えたサイズへと成長しており
とても人間のものとは思えないほど大きかった

ゾンビ…リッカーと二度も犯されたクレアも恐怖で体が震え…

クレア「あっ…あああああっ！！！！？」



体を抱えられ大きく全身を揺さぶられるクレア…

クレア「あがっ…太すぎ…奥までは行ってきてるううっ!!!」

エイダ「あらあら…貴重なデータになりそうだけど…
可哀想だから助けてあげるわ…。」

Gに犯されるクレアを興味深そうに眺めていたエイダだったが
ゾンビ犬に犯された自分を重ね…彼女を助けようと銃口を向けた

クレア「あああっ…エイダ…後ろにっ！！！！？」

エイダ「えっ…！？」

クレアの言葉に振り返ったエイダ…

そこには…どこから迷い込んだのか何体ものゾンビの姿があり
エイダの体へと抱きついてきたのであった

エイダ「しまったっ！？油断したっ…！！」

目の前で繰り広げられた生物兵器の繁殖行動に
目を奪われていたエイダはゾンビの接近を許してしまった…

エイダ「あああっ…そんなところ…触らないでっ！！！！！！？」

ゾンビにドレスを引き裂かれ乳房を鷲掴みにされるエイダ
下着までズリ下ろされ秘部まで丸出しになり
ゾンビはすぐに反り立った肉棒を強引に
秘部へと押し込み勢いよく腰を振り出した…

エイダ「あああああっ！？！？？」

さらに…背後からもゾンビが迫り…
エイダの尻穴に肉棒を押し当て…強引に肉棒をねじり込み
挿入したのであった

エイダ「あがあああっ！！！？！？？」

2本の肉棒で激しく攻められるエイダ…
そこに冷静な女スパイの姿はなく
激しく肉棒で攻められ悶える一人の女の姿があった…



あはあっんっ!!
ダメ…そこは…2本同時なんてっ!!
うぐっ…奥にまで…入ってきてるっ!?

警察署の地下で怪物に犯される二人の美女…

クレア「うっ…あぁっ!? 子宮が…押されてっ…あぁあ!!!」

エイダ「あぁあ…奥まで…入ってきてるっ…!??」

怪物に犯され乱れる女たち…

極太の肉棒で攻められ続け喘ぎ続けていたが
特にクレアの体は既に限界に達していた

ゾンビ…リッカー…と激しく犯され続け体力を消耗しきっていた
さらに短時間に幾度も犯され続けてきたことにより
彼女の肉体は普段の何倍も敏感になり
膣内を肉棒で攻められるだけで大量の潮を噴き上げる…
まるでウイルスに感染したかのように
クレア…そしてエイダの肉体は次第に感度を増し続けていた

クレア「ああああだめえっ…妊娠しちゃううううっ!!!!?」

クレアの膣内に溢れた精液…
強く脈打ち射精される精液はクレアの腹部を
妊婦のように膨らませ精液で満たしていった…

クレア「あっ…あがぁあっ…!?!」



エイダ「何なの…体がおかしいっ…！？
こんな敏感に感じるなんて…どうしてっ！？」

僅かに攻められただけで絶頂を迎え潮を噴き上げてしまう体

エイダ「あはあっ…だめ…これ以上はっ……！！？」

エイダは自分でもこれ以上弄ばれれば危険だと感じていた
これ以上の快楽を与えられれば…戻れなくなると…
そんなエイダの期待に応えるかのように…
無限の体力と性欲を持つゾンビは彼女の体をさらに攻め続けた…

エイダ「あああああああっ…イクっ…
ダメっもうイキたくないっ！！！！??」

再び大量の潮を噴き上げると同時に…
ゾンビ達の大量の射精を受けたエイダ…
全身を痙攣させ白目を向きぐったりと
ゾンビに身を任せたまま放心してしまっていた



Gウィリアムはクレアの体に幾度も射精し
クレアは全身が精液塗れとなっていた…

しかし、Gは交尾を終えると
彼女がシェリーではないことをようやく理解したのか…
クレアを解放しどこかへと立ち去って行った…

ゾンビたちも交尾を終え満足したのか…新たな獲物を求めて
彷徨い歩いていった…

残されたクレアとエイダの二人…
精液に塗れ放心する二人の表情は笑みを浮かべ
快樂に魅了されたものとなっていた…

シェリー「…クレアたち…大丈夫かな？」

エイダにより逃がされたシェリー…
無事に父親であるGの魔の手から逃れることができていたが

下水道へと続く地下道でクレアたちをじっと一人で待ち続けていた

静まり返った地下道にシェリーを襲う物などいないかに見えた…
だが…

G-ウィルスによる影響は地下道の小さな生物にさえ
影響を与えていたのであった…

シェリー「えっ…なにこれっ…!？」

排水溝から伸びた一本の触手が…シェリーの足へと絡みついた

シェリー「きゃああああっ!？」

触手のすさまじい力により引き寄せられ転倒してしまったシェリー

排水溝の奥からは何本もの触手が伸びシェリーの体へと絡みつき
体の自由を奪っていった…

シェリー「いっ…いやっ…クレアっ…たすけてっ…!？」

ウイルスの影響により誕生した触手…
元が何であったかは解らないほどに変異していた

シェリー「あぁっ…いやっ服の中にっ…!?!」

触手はシェリーの衣服の中に入り込み
全身を念入りに調べるように纏わりつく

そして…

シェリー「きゃあっ、そんなところっ!?!」

触手はシェリーのパンツの中にまで入り込み…
彼女の秘部に密着し…吸い付いてきたのであった

シェリー「ひあっ…なにっ…奥に何か…入ってきてるっ!!?!」



シェリー「うああっ！？痛いっ…やめてっ！！」

触手はシェリーの膣内に入り込み中でウネウネと動き始める
その膣内の湿った環境を気に入ったのか…
触手はシェリーの秘部から出ようとはしなかった

シェリー「うあああああっ、中で動いてるっ…！！
だ…だめっ…漏らしちゃうっ…っ うっ！??」

激しく膣内で動く触手…
気持ちが高ぶり全身が熱くなったシェリーの体は
潮を噴き上げてしまった…

シェリーの膣内でその体液を吸い栄養とする触手…
攻めれば攻めるほどに溢れてくることを覚えたのか
シェリーの体を執拗に攻めて止まることは無かった…

シェリー「ふああああああっ…！??」



激しく攻められぐったりと倒れ込んでしまうシェリー
触手により攻めはその後しばらく続くこととなる…

Episode 03

クレアたちがラクーンシティを訪れる数日前…

下水道で起きた特殊部隊とGの戦闘により

T-ウィルスが流出…

ネズミなどを媒介として生活用水を汚染させていき

市内に感染が広がり始め

ラクーンスタジアムで起きた大規模な暴動をきっかけとして

市内に感染が拡大…

ゾンビの数は爆発的に増えていった…

数か月前の「洋館事件」の生存者であり

S.T.A.R.S.隊員の「ジル」

アンブレラの動向を探るために市内に残っていた彼女は

市内で感染が広がり始めると、いち早く事態を把握し

市民の避難や救出に奔走することとなった…

ジル「いつかこうなると思っていたわ…。」

ジル達S.T.A.R.S.の隊員たちは

あの洋館で起きた事件がいつかこの街でも起きることを

予見しており

独自に市内のあちこちに武器弾薬などの物資を確保していた

だが…

想像を超える感染の広がりにより増えていくゾンビの群れを前に…

個人で蓄えていた弾薬などはあっというまに底を突き

事故や火災が多発している市内でジルは孤立していた

ジル「このままじゃゾンビの餌食になるだけだわ…

どこかで武器を確保しないと…！」

市内の地図を前にジルは考え込んでいた

なぜか無線に応答は無かったが警察署まで行けば

多くの警官たちと十分な武器弾薬が確保できるはず…

かつての同僚たちはジル達の話しを信じようとはしなかったが、

今の状況ならば全面的な協力を得られるに違いない

警察署が避難所となっていることから多くの市民たちがいることも間違いないはずだが…
問題はゾンビで溢れた市内を
僅かな弾薬で乗り切らなければならないことであった

ジル「この場所…私のアパートの近くね…
この距離ならいけるかもしれない。」

市内を何日も彷徨っていたジルはいつの間にか
自分のアパートのすぐ近くにまで戻ってきていたらしい
自室にも十分な武器と弾薬が確保しており
ジルは数日ぶりにアパートへと戻ることになる

数日前には、逃げ惑う市民と悲鳴が
途切れることが無かった市内の大通り…
しかし今では人々の声は無く
大量のゾンビが彷徨う光景が広がっていた

ジルはゾンビを避けながら進み弾薬の消費を抑え
何とか自分のアパートまで辿り着くことに成功した

ジル「…ずいぶん様子が変わってしまったわ…。」

見慣れた周辺の景色の変貌ぶりに愕然とするジル
いつかこうなるのでは…という悪夢を何度も見たが
実際にそれが現実となるなど想像したくはなかった

ジルは人の気配が無くなったアパートへと入り自分の部屋へと向かう…

ジル「なに…鍵が壊されて…部屋が荒らされてる!？」

ジルの部屋は略奪にあったのか…
鍵は壊され室内は荒らされた痕跡が残されていた

アンブレラのスパイを警戒していたジルは
かなり頑丈な錠を取り付けセキュリティも
万全な備えをしていたはずだったが…

ジル「……周りの部屋は荒らされた形跡はないわね
私の部屋だけということは…
アンブレラの仕業ということかしら…。」

アンブレラの関係者が市内の混乱に乗じて
厄介な存在となっているS.T.A.R.S.隊員を
始末しようとした可能性もある…
しかし…クローゼットの中まで物色されているのにも関わらず…
その奥に置かれていた金庫には全く手を付けていない
室内の状況に疑問を感じながらも
ジルは武器弾薬を補充するために寝室へと向かった…
ジル「よかった…武器は無事ね…
それに私たちが集めた証拠も……。」

床下に隠された武器弾薬とジル達が集めた
アンブレラが違法な実験を行っているという資料と証拠の数々…
それらは全く手を付けられずそのまま残されていた
クローゼットの中は荒らされジルの衣服があちこちに
散らかっているのにも関わらず…

ジル「…アンブレラの仕業じゃない…一体誰が？
考えても仕方ないわね…とりあえず着替えて…準備しないと！」

ジルはこの数日ずっと身に着けていた衣服を脱ぎ捨て
下着からすべてを着替えようとした…が

ジル「……下着がない…それに…お気に入りの服も…。」

ほとんどの下着と
ジルが愛用しよく身につけている衣服のほとんどが消え去っていた…

ジル「……これはもしかして…アイツの仕業…。」

ジルがアイツと呼ぶ存在…それは
数か月前からジルにストーカー行為を続けている中年男
元々はジルが捕らえた犯罪者であったが
その逆恨みからジルを執拗に追うようになり
今ではジルのファンを自称するストーカーへと変貌してしまった…

一か月ほど前からはジルと同じアパートへと越してきており
アンブレラ対策に集中したいジルにとって
何よりもうっとおしい存在となっていた…

ジル「もう完全な変質者ね…街がこんな状況でなければ
すぐ檻に放り込んでやるんだけど…。」

ジルは男に荒らされた衣服の中から着れそうな服を探していたが…
男が触った服を身に着けるのはいささか抵抗があった

ジル「…う～ん…こんな服しかない…か。」

クローゼットの奥にしまってあった服を取り出し身に着けたジル…
9月下旬…まだラクーンシティは気温が高いが
ゾンビが大量発生している街をさまようには不適切と言える
肩を大きく出した露出の高い服装

ジル「…警察署まで行けば…S.T.A.R.S.の服があるからそれ
までは仕方ないわね…。」

ジルが服を着替え終わった頃…
その背後に1つの影が迫りつつあった…

ジル「誰っ!？」

銃を構え振り向いた先にいたのは…
まさにジルが予感したとおり…
執拗にジルをストーカーしていた男の姿がそこにあった
すでにゾンビ化しておりジルに向かってゆっくりと近づいてくる…

ジル「やっぱりあんただったのね…。」

目の前のゾンビ化したストーカーを見てつぶやいたジル
ゾンビとなってしまったストーカーに
同情の気持ちは少しも無いはずだったが
それでもこんな最期を迎えてしまった事は気の毒に思えてしまう…

ジルは銃を握る手に力を込めゆっくりと引き金を引いた
だが…

ジルを目の前にして
興奮したストーカーゾンビの動きは途端に早くなり、
一気にジルへと迫り抱きついてきたのであった

ジル「きゃあっ！？ いや、離れなさいっ！！？」

ゾンビとなり恐れがなくなったのか…
ジルの豊満な乳房に顔を押し付けながら尻を撫でまわすゾンビ…

ジル「な…なんなの…ゾンビなのに…こんな！？」

ジルの頭の中に洋館事件での記憶がよみがえる…
ゾンビやハンター…様々な生物兵器に弄ばれ喘いだあの夜…

しかし…あの夜経験したどの相手よりも…
このストーカーゾンビは人間らしく
ジルの体を弄び楽しんでいるようであった…

人間であった時の記憶が残されているのか…
アンブレラの研究員が見れば興味を抱くことは間違いない

ジル「あああっ…ちょっとそこはっ！！??」

ジルの両足を強引に広げ秘部を下着の上から激しく刺激する
ストーカーゾンビ…

大きく反り立った肉棒を擦り付け

激しく乳房を揉むその様子はとてもゾンビとは思えない

ジル「あっ！??待って…ダメ挿れないでっ！??」

下着をずらし肉棒をジルの秘部へと擦り付け出したゾンビ
そして…

ためらくことなく一気に根元まで挿入し激しく腰を振り出す

ジル「あはっ…あああああっ！??？」



ゾンビ化し極太となった肉棒がジルの子宮を大きく押し上げる

ジル「うあああっ…この感覚…あの時と同じっ…!？」

再びジルの頭の中にあの洋館で犯された時の記憶が蘇る
始めてゾンビに襲われ弄ばれた時…

激しい苦痛に耐えながらもどこかで感じていた快感…
人間相手では味わえない野性的な…全力のセックス…
次第にその快楽に魅了されていった自分…

ジルにとって封印したい苦い記憶であったが
その記憶が鮮明に蘇り…あの時の感覚に再び支配された

ジル「あああああっ!!??」

激しく乳房を揺らし叫んだジル…

快楽に耐え切れずあっという間に絶頂を迎え潮を噴き上げた

何か月間も味わえなかった快楽にまるで体が喜んでいるかのようであった

ジル「ああ…体が…敏感になってきてる…？」

このままじゃ…またあの時みたいに…っ…!？」

快楽に溺れていき完全に理性を失ってしまったあの夜…

レベッカと共に快楽の虜となったが…

同僚のクリスとバリーの救助により何とか我に返ることができた…

その後しばらくの間はS.T.A.R.S.内でも気まずい空気が流れ
立ち直るのに時間がかかった…

街が地獄と化した今…こんなことをしている暇などない

ジルは強い意志をもってゾンビに抵抗しようとしたが…

ジル「えっ…うそでしょ…中に出す気…!？」

だめ…今出されたら…気持ちよくて…っ…

戻れなくなるっ!？」

ゾンビの動きがより早くなり

射精が近い事を感じ取ったジルは必死に逃げようとした…

中出しされる快楽に耐えきれぬ自信が彼女には無かった…

ジル「うああああっあああっ…!??？」

中出しされる寸前…銃を手に取りゾンビの頭部を撃ち抜いたジル…
力なく倒れていくストーカーゾンビ…

ジル「あ…危なかったわ…このまま…中出しされたら…
えっ…うそっ…あぐっっ!? ???????」



ゾンビを無力化したのにも関わらず…
射精寸前だったストーカーゾンビはそのままジルの膣内で
大量に射精したのだった…

下半身がつながったままベッドの上で快楽に悶えるジル…
その後しばらくの間…快楽の余韻から抜け出せずに苦しんだジル…

ジル「はあ…はあ…体力がもたない……。」

何とか快楽から抜け出し…装備を整えて警察署へと向かう準備が整ったジル…

数日間睡眠も取らずに市内を彷徨っていたのにも関わらず
ストーカーゾンビに襲われた後のジルは
性欲を満たせた影響なのか…またはウイルスの影響なのか…
肌が潤い輝いているように見える…

ジル「さあ、警察署へ向かうわよ…！」

その足取りは非常に軽やかであった

ジル「ようやく警察署に着いたけど…静かすぎる。」

警察署に辿り着いたジルは想像とは違うその様子に動揺を隠せない…

生存者がまだいるのであれば、周囲に
もっとゾンビ達が押し寄せていてもおかしくないはず…

ゾンビが集まっていないということは…
そこにいる生存者の数も少ないことを示している

ジル「まさか…もう手遅れなんてことは…。」

すぐにでも警察署へと入ろうと入り口を探すジルだったが
正面入り口は多くの車両が放置されゾンビがうろつき…
近づくこともできない…

他の窓や扉はことごとく施錠やバリケードで塞がれ
警察署は完全に封鎖されていた

しかし、ジルはなんとしてもS.T.A.R.S.のオフィスへと
向かわなければならない…

オフィスには高性能の無線装置が設置してあり
外部へと連絡することが可能となっている
既に警察署内にいる警官が連絡した可能性は高いが

アウトブレイクが発生してすでに数日…
まだ生存者がいることを外部に知らせる必要があった

そしてオフィスにはより強力な武器弾薬だけではなく
S.T.A.R.S.の様々な装備も保管してある…
生き延びるためには何としても手に入れておきたかった

ジル「…仕方ないわ…あの道を通るしかないわね…。」

あの道…とは…
一部の警官しか知らない警察署内部へと続く通気口…
遅刻した警官がこっそりとそこから潜り込んでいる姿を
目撃したことがあり
ジルも訓練に遅れそうになった時に一度だけ利用したことがあった

ジル「よかった…ゾンビが通った形跡もないわね…。」

狭い通気口を通り…何とか署内へと入り込むことができたジル…

しかし…

ジル「そんな…うそでしょ…。」

通気口を抜けた先には…何匹ものゾンビ犬の姿があり
ジルのことをじっと見つめていた…

ジル「……………」

音を立てず刺激しないように…
そっとその場を立ち去ろうとするジルだったが…

ゾンビ犬はジルに向かって吠えだし…
3匹のゾンビ犬がジルに向かって飛びかかってきた

ジル「くっ!？」

咄嗟にゾンビ犬の体を交わすジル…
銃を構えゾンビ犬へと銃口を向け引き金を引こうとした…

だが…ゾンビ犬はそれ以上ジルを襲おうとはせず…
ジルのことをじっと見つめ続けていた…

ジル「いったい…どうしたの…？
もしかして…これってっ…！？」

激しく興奮した様子でジルを見つめるゾンビ犬…
その股間からは大きく膨らんだ肉棒が姿を見せ
ジルとの交尾を望んでいるのは間違いなかった

ジル「そんな…大きなもの…見せないで…興奮しちゃうじゃない…。」

ジルの体が肉棒を求めているのか…一気に体が熱くなり
鼓動が高鳴ってしまう…

頭の中が真っ白になり…
ジルは無意識のうちに跪き…自ら下着を下ろすと
ゾンビ犬のほうへと尻を向けて突き出した…

ジル「……私…なにやってるのっ…？
うっ…あはあああっ！????」

ジルが尻を見せた途端…
ゾンビ犬はジルの上へと覆いかぶさり肉棒を秘部へと
密着させ激しく体を震わせはじめた

ジル「あああああっ！??????」

しかし…ゾンビ犬の肉棒は秘部ではなく次第に尻穴へと向かい

ジル「あっ…ちよっとっ…そっちはっ！！
あはあああああっあ！????」



ああっ…ダメっ！
そっちはお尻っ…ううっ!!
なんで…こんなに気持ちいいの…!!

ゾンビに襲われて間もないジルの体は
快楽に抵抗できないほど敏感になっていた…

挿入され一気に溢れる愛液…
全身で感じる快楽に思わず口元が緩んでしまう…

ジル「あああ…お尻なのに…こんな気持ちいいの…!??」

再びあの洋館の記憶が蘇るジル…
洋館から寄宿舍へと続く庭でケルベロスに初めて犯された
あの時の感覚…

ジル「あああっああ…すごいっ！！
あの時よりも…ずっと気持ちいいっ…！！??」

体が快楽を受け入れている為か…
アナルであっても
想像以上の快楽を感じ悶えるジル…

ジル「あはあああああああっ！??？」

何度も潮を噴き上げ喘ぎ声を上げるその姿は…
とてもアンブレラが最も警戒するS.T.A.R.S.隊員とは思えない姿であった
もはや快楽を受け入れたジルに恥じらいなどなかった

ジル「えっ…そんな…2本同時になんて…入らないわっ…！？」

我慢できなくなった2匹目のゾンビ犬が
ジルの秘部へと肉棒を押し付け
同時に2本の肉棒がジルの体の中へと挿入された

ジル「あっ…あああああがああっ！????」



あまりの快樂に言葉も出ないジル…

3匹目のゾンビ犬は困ったようにジル達の周囲を回ると
ジルの口元へと肉棒を押し付け強引に口内へと押し込もうと
してくる…

ジルはそれを抵抗なく受け入れ音を立ててしゃぶり出した

3匹のゾンビ犬と1つになり快樂で満たされたジル…

この快樂からは簡単には抜け出すことができそうになかった…

Episode 04

警察署地下…

Gという怪物と化したシェリーの父親
ウィリアムに弄ばれ続けたクレア…
そしてエイダの二人…

ゾンビに襲われたエイダと共にかかなり疲労している様子だったが
姿が見えなくなったシェリーの行方を搜索していた

クレア「シェリーっ！！ どこにいるの？」

エイダ「…この辺りにいるはずなのに…。」

懸命にシェリーを搜索する二人だったが
その姿はおろか手がかりも残されていなかった

エイダ「もしかしたら…。」

クレア「何…もしかしたらって…？」

エイダ「あの子…もしかしたらアネットが…。」

クレア「アネット…？」

エイダはシェリーの母親であるアネットの事を語り出した
夫であるウィリアムと共に研究所の研究員であり
今回、ウイルスによる汚染を広めたのは彼女のせいであると語った…
そして夫があのような化け物と化し娘の後を追っている状況となれば
娘シェリーを保護していてもおかしくはない

クレア「シェリーの母親が…でも
まさか娘にまでおかしな実験をしたりしないわよね？」

エイダ「…その心配はいらないと思う…
むしろ危険なのは父親のほうね。」

クレア「あれが本当にシェリーのお父さんだなんて…
まだ信じられないわ…。」

クレアは自分を襲った怪物の事を思い出していた
シェリーの父親だという怪物…
あの極太の肉棒で突かれたあの時の感覚…
あまりの快楽に失神してしまうほどの衝撃に襲われ
我を忘れてしまったあの瞬間のことを…

エイダ「…それにしても…良い服を見つけたものね？」

クレア「…えっ…！？ ああ、これねっ！？
駐車場の車の中にあっただけけれど…
驚くくらい私にピッタリなの…。」

度重なる怪物との連戦で引き裂かれた衣服…
乳房から秘部まで完全に丸出しになっていた

シェリーを捜索中に訪れた地下駐車場で偶然見つけた
衣服はクレアの体形に合うだけではなく
どこか懐かしい気持ちにさせられるものだった

クレア「ところでレオンは…？見つかったの？」

エイダ「さあ…どこかで市長の令嬢の相手でもしているんじゃない？
大丈夫、ちゃんと伝言は残してきたから…。」

レオンが後から追ってくることを信じ…
地下下水道へと降りていくクレアとエイダ
薄暗い地下道と強烈な匂いに耐えながら進んでいくと…

クレア「ケーブルカー…？ こんなところに？」

扉を抜けた先には地下には不似合いな立派なケーブルカーの姿があった…
不自然なほどに立派に佇むその姿に圧倒されるクレア

エイダ「これがアンブレラの地下研究所に繋がっているはずよ。」

クレア「……………待って…何か聞こえない？」

エイダ「たしかに…女の子の声が…。」

ケーブルカーへと近づいていった時…
僅かに聞こえてきた少女の声…
それは間違いなくシェリーの声であった

クレアとエイダは声のする方へと走り出していった
そして…

クレア「ああ、シェリーっ!？」

エイダ「あれはっ…まずい状況ねっ…！」

シェリー「あああああっ!？ ダメエエツ!？」



クレアとエイダが見下ろした先…
ごみ集積場の中にシェリーの姿があった

しかし…シェリーは謎の小さな怪物に襲われており
丸出しになった小さな尻に何匹も張り付き
シェリーの秘部を激しく刺激していた

クレア「な…なんなのアレ…!？」

エイダ「おそらくウィリアムが生み出した生物の幼体
…本能で…遺伝子の近いシェリーへと
襲い掛かっているのかもしれない…。」

シェリー「あああああっでちゃううっっ!!!!」



クレアとエイダに見られていることもしらずに
G幼体に攻められ何度も潮を吹くシェリー…

クレア「シェリー…ああ…あのままじゃ耐え切れない…
あそこへ行くには…！？」

エイダ「あの扉を開くしかないようだけど
チェスのコマが鍵になっているようね…。」

クレア「なにそれ…意味わからない…！？
しかも6つも必要だなんて…
と…とにかく急がないと…！！」

エイダ「そうね…鍵を探しましょう！」

ケーブルカーやチェスのコマ型の鍵など
想像を超えた物が地下に隠されていた…
しかし驚いている暇もなく
クレアとエイダはシェリーを助けるために
6つの鍵の搜索へと向かうこととなる

クレア「待って…また何か…声が聞こえる…？」

エイダ「…た…たしかに聞こえるわね…
まさかアネットまで…??」

下水道の奥から聞こえてくる女性の喘ぎ声…
それはシェリーとは違い
大人の女性の声であった…

もしかしたらシェリーの母親アネットでは…
そう考えた二人はその声の方へと警戒しつつ向かう
もしアネットであるならば鍵の在処を知っているはず
もしかしたらマスターキーを持っている可能性もあった

クレア「この辺りから声は…えっ…なに…これはっ!？」

エイダ「こ…これは…まさか…っ!？」

クレアとエイダの視線の先には…

巨大な怪物に拘束されたS.T.A.R.S.隊員…
ジル・バレンタインの姿があった…

ジル「あっ…あはあああ…あああ…。」



見たこともない巨大で醜悪な怪物の肉棒が
アナルに挿入され…腹部は妊婦のように膨らんでいた

クレアはそれが誰か解らなかったが…
ジルの衣服のS.T.A.R.S.のワッペンを見て
兄の同僚であることを理解した…

エイダ「まさか…ジル・バレンタイン…どうしてここに…
ネメシスから逃れたというの……。」

クレア「エイダ…あなた本当にFBIなの??
一体何者…何を知っているのよ!?!」

エイダ「……………」

エイダのつぶやいた一言にさらに疑惑を持ったクレア
しかしエイダは目の前の光景に呆然とし言葉も出ない

ジル「あはあああっあああつ!?!
また生まれるうううう!!!!」



ジルの秘部から這い出すように生まれてきたのは
先程シェリーを襲っていた小型の怪物であった

クレア「なっ…なにっ…!？」

エイダ「もう捕らわれて何日も経つみたいね…
まさか母体として利用されているなんて…。」

G生物の想像以上の知力と
ジルの生命力に驚かされるエイダ…

エイダ「放置していくわけにはいかない…
これ以上怪物を生子出されると厄介だしね…
助け出すしかないわ……。」

クレア「そ…そうよね…兄の同僚みたいだし…。」

足が震えるクレアとエイダ…
もし自分がこんな目に合っていたらという恐怖と同時に
ジルのうっとりとした表情を見て…
こうなればどんな快樂を感じられるのかという好奇心…
この異常な状況下で二人の精神状態は追い詰められ
正常な思考を保てなくなっているようだった

エイダ「弱点はおそらく肩にある巨大な目…
あそこに同時に撃ち抜けば…。」

クレア「待って…あそこ…誰かいるみたい？」

エイダ「えっ…!？」

地下通路の奥…帽子とコートを纏った男性がこちらへと
ゆっくりと近づいてくるようだった

しかし近づくほどに感じるその男の異常なほどの体格…
迫るほどにそれが人間離れした怪物であることを理解させられる

クレア「あれ…？なんだかすごく大きいような気が…。」

エイダ「ええ…まずいわね…ひとまず逃げるわよ…。」

危険を感じた二人はジルを置き去りにして走り出した二人に迫った大柄の男のように見えるのはアンブレラが送り込んだ生物兵器…「タイラント」目撃者の始末を目的に容赦なくクレアたちを追い回す…

クレア「あいつどこまで追ってくるのっ！？」

エイダ「アイツは私が引き受けるわ…
あなたはジルの救出に向かって…！
あんな状態だったけど…たぶん戦力になるはず！」

クレア「わかった…エイダも気を付けて！」

地下道の分かれ道で走り続けるクレアと…
立ち止まりタイラントへと銃弾を撃ち込み引き付けるエイダ…

エイダはタイラントの気を引き寸前で軽い身のこなしでその一撃を交わそうと待ち構えた…しかし

エイダ「えっ…！？」

クレア「な…なんでこっちに来るのっ…！？」

タイラントはエイダを無視しクレアの後を追い続けた

エイダ「…なぜクレアを追うのかしら…？
仕方ない…アイツはクレアに任せて…
私はシェリーを助けに向かうことにするわ。」

エイダはいつの間にか肩にかけていたバッグのなかから扉を開くために必要なチェスのコマ型の鍵を取り出した

エイダ「さすがS.T.A.R.S.隊員ね…全部揃ってる。」

ジルを発見した際、エイダはその足元に落ちている
S.T.A.R.S.のロゴが入ったバッグに気付いた

その中にはチェス型の鍵全てが揃っており
数日前に下水道を訪れたジル・バレンタインにより
集められていたものであった

エイダ「おかげで楽ができたわ…お礼に助けてあげる。」

エイダはジルの足元に落ちていたショットガンを手に取り
怪物の弱点目がけて至近距離で引き金を引いた
ジルを捕らえ動かない怪物は格好の的であり
弱点が破裂しG成体はそのまま絶命…
ジルは数日ぶりに解放されることとなった…

ジル「あっ…ああああ…。」

エイダ「……しばらくは動けそうにないわね…
後でまた迎えにくるからそこで大人しく待ってなさい。」

エイダはジルをその場に残し…
シェリーを助け出すために駆け出していった…

エイダが立ち去った後…放置され動けないジルへと
大きな影が迫っていた

クレア「ああっああああっ！？離してっ！！??？」

タイラントから必死に逃げていたクレアだったが
体力も限界に近づき、
やむを得ずタイラント相手に戦いを挑んだのであった…

ありったけの弾薬を使い何とかタイラントに膝を突かせることに成功したのだが

クレア「えっ…もう立ち上がるのっ…!？」

ほんの十数秒…膝をついただけでタイラントは立ち上がり再びクレアの後を追いつき始めたのであった

しかし…体力も限界が近く弾薬を尽きたクレアはあっさりとタイラントに捕まってしまった

クレア「もしかして…私を犯す気じゃないでしょうね…!？」

怯えると同時にどこか期待するような表情を見せるクレア

クレア「やっぱり…いやあっやめてええっ!!!!？」

タイラントのコートの中から極太の肉棒が姿を見せた

クレアのショートパンツを引き裂き尻を丸出しにさせるとタイラントはすぐに肉棒をクレアの秘部に密着させ一気に根元まで挿入したのだった

クレア「あああああああっ!？」

すごいっ…一気に奥まで届いてるううっ!??」



なっ…なんなのコイツ…!?!
いきなり挿れてくるなんて…
ああっ…気持ちよすぎてっ…
抵抗できないっ…!!

クレアの体を軽々と抱え人形を扱うかのように
激しく揺さぶるタイラント
数時間前のクレアであれば耐え切れないほどの
苦痛であるはずだったが

今のクレアには快樂しか感じられなかった…

クレア「あああああっ！太くて…気持ちいいっ！！」

シェリー…そしてジルの喘ぐ姿を見て
体がムラムラと性欲が湧き上がっていたクレア…
相手が生物兵器であろうと関係なく
ただ快楽に喘ぎそれを受け入れてしまっていた…

クレア「あああ…私はシェリーを助けないと…っ…
ダメっ…気持ちよすぎて…何も感がないっ！」

数時間前とはまるで別人のように喘ぎ叫ぶクレア…
クレアだけではなく…ジル…エイダまで
女たちを惑わす力がこの街に渦巻いているようだった

クレア「あああっ…ダメっイク…もうイっちゃうううっ！！」

激しく子宮を刺激され絶頂を迎えたクレア…
大量の潮を吹くと同時に
タイラントの肉棒から大量の精液が射精され
クレアの膣内へと溢れていく…

クレア「あああああああっ！！！！??？」



大量の精液に腹部は大きく膨らみ…
乳首からは大量に母乳を吹きだしていた…

クレア「ああああっ…私…妊娠しちゃった…。」

精液に塗れながら笑みを浮かべるその表情は
快楽に満ちると同時にどこか穏やかでもあった…

エイダ「…これで…開くはず…！」

チェスのコマ型の鍵を正しく並べ扉が開く

エイダ「…早く助けてあげないと…あの子の体力が持たないわね…。」

シェリー「ああっ…ああっああ…。」

ごみ集積場の扉の向こうからシェリーの喘ぎ声が聞こえてくる

しかし…扉は電力が必要らしくビクともせず
エイダは電力復旧のために主電源室へと向かった

しかし…

エイダ「……くっ…どこまでしつこいのかしら…！？」

電源を復旧させた途端…

天井を突き破り現れたのは…

シェリーの父親であるウィリアム…

先程見た時よりもウィルスの感染が進んでおり

人であった面影は薄れたただの怪物と成り果てていた

エイダ「感染が進んでいるようね…

ここで何としても始末しないと…。」

エイダは狭い室内で戦うことは不利だと判断し
広い場所へと移動し戦うために素早く行動した

エイダ「ここは…何か建設中みたい
奴を倒す舞台にはうってつけ…」

浄水施設建設現場へとたどり着いたエイダ

そこは底が見えないほど深い竖穴となっており
大型のクレーンに吊るされたコンテナなどが残され
怪物を奈落へと突き落とすための舞台が整えられていた

エイダはすぐにクレーンを動かしGを突き落とすための準備を開始した…

しかし…Gとの戦いは想像を超えた結末を迎えることになる

エイダ「何なの…この動き…！！？」

Gと戦い続けるエイダ…軽やかな動きで敵の攻撃をかわし続けていたが…
Gの動きはエイダを傷つけることを目的としておらず
明らかに捕らえることを目的としていた…

隙の大きな攻撃などは見せず執拗にエイダに迫り
捕らえようとしてくる…

エイダ「こんなに接近されていたら…
クレーンを動かすこともできないっ！？」

エイダの顔にも焦りの色が見え始めていた…
もし捕まれば…間違いなく交尾の相手にさせられる
恐怖と同時に…エイダも心のどこかで興奮し
快楽を求めている自分がいた…

エイダ「しまった…っ…きゃああああっ！？」

僅かにバランスを崩した瞬間をGは見逃さなかった

巨大な手で捕らわれたエイダのドレスの隙間から
下着を失い丸出しになった秘部が姿を見せる…
性欲が抑えきれなくなっていたその秘部からは
大量の愛液が溢れ太股を伝い流れていた

エイダ「ああああ…私が捕まるなんて…もう…好きにするといい…。」

頬を真っ赤に染めたエイダ…
今までに見せたことの無い女性らしい表情で
照れているようだった…

エイダ「あああ…そんなすぐに挿れるのね もっと焦らしてほしいのにつ
うあああっ!??」



Gは焦らすこともなくすぐに肉棒をエイダの膣内から挿入させ激しく体を降り始める…
その強引で野性的な交尾に悶えるエイダ…

全身に走る激しい快樂に歡喜の声をあげていた

エイダ「あはああああっ！？？
すごく気持ちいいですうっ…！！
もっと激しくっ…してください…！！」

激しい交尾にも関わらずより快樂と激しさを求めるエイダ
クールな女スパイではなく
快樂を求める従順な女へと変貌し
ただひたすら精液を欲していた

喘ぎ大きく体を揺さぶられるエイダ…
その揺れる乳房…その先端からは白い液体が
吹きだし始めていた

極太の肉棒が体を押し上げる度に溢れる液体…
母乳とした思えないそれは
クレアと同様…ウイルスの影響なのか
その体に大きな変化が起きているようであった

エイダ「あはああああっ…お願いっです…
中にっ…私の中に早く出してえっ…！！！」

ただ精液を求めるエイダ…
Gは大きく肉棒を脈打たせ…
大量の精液をエイダの膣内に射精していった…



あああああっ!!
うっ…おなががっ…
はああああんっ!!

エイダ「あああああっ!!??????」

今までで最高の快感が押し寄せ頭の中が真っ白になった

母乳と精液に塗れたその美しい体は快楽で震え
エイダの表情はジルやクレアと同じ…
快楽に満たされ笑みを浮かべていた…

それから 1 時間後…

クレア「ああああああっ!？」

エイダ「あはああああああっ!!??」

ジル「ふああああああっ!？」

地下道の奥で喘ぐ 3 人の美女…

G 成体に抱かれ悶える 3 人の腹部は大きく膨らみ
その表情はうっとりとした快楽に酔いしれていた…

怪物の虜となり快楽から抜け出せなくなった女たち
悪夢と化したこの街から脱出することなど忘れてしまっていた…

唯一残された希望は…一人残されたレオン…
果たして彼は今どこに…

Episode 05

クレアたちが下水道へと向かっていた頃…

警察署近くにある孤児院で独りの女性が目を覚ます…

???「…はっ…あたし……？」

孤児院で目覚めた女性は…
市長の娘「キャサリン」

市内でアウトブレイクが発生した際
安全のためと…
父親である市長の指示で警察署へと
避難していた…
しかし…

父の友人である人柄の良いはずの署長「ブライアン」
が突如発狂し…
警官や避難していた市民たちに対して発砲してきた
キャサリンはその混乱の中…頭を打ったらしく
詳細は思い出せなかったが

キャサリン「あたし…たしかこの部屋で
署長になにか注射されそうになって…。」

意識が朦朧とする中…たしかに署長と格闘になり
偶然手にしたナイフで抵抗した記憶があった…

キャサリン「うわっ…やっぱり…わたしが殺しちゃったの…？」

足元に倒れている血まみれの署長の姿を見て
それが夢ではなく現実であったと理解させられた

キャサリン「そうだ…こんなことしてる場合じゃない…
ベンを助けないと…っ!？」

キャサリンは署長が所持していた銃を手に取り
孤児院から…
愛する人が捕らわれている警察署まで走り出して行った…

ゾンビで溢れた市内…
愛の力なのかキャサリンは巧みにゾンビの攻撃を交わし、
次々に脳幹へと華麗に銃撃を決めていく…

そして…

キャサリン「ようやく…着いた…待っていてベン…。」

レオン「…女ってやつは…。」

その頃…警察署地下駐車場へと戻ってきていたレオン
さんざん署内を走り回り…エイダを探し続けていたが
発見できず、地下駐車場へ戻ってきた

そして、地下駐車場に残されたエイダのメッセージを見て
自分が一人警察署に取り残されていることを理解した

(クレア、シェリーと先に行くわね エイダ)

警察車両のフロントガラスに口紅で描かれた文字を
呆然と見つめるレオン

レオン「……泣けるぜっ…。」

悲観に暮れるレオンの元へと
愛する人を救うために駆けつけたキャサリンが通りかかった

キャサリン「待ってて…すぐに行くからっ！」

レオン「……………おい、あんたっ！？」

キャサリン「…えっ…あんた誰よっ！？」

レオンを見てかなり警戒した様子を見せるキャサリン
生存者と出会えたことに喜ぶこともなく
不審者を見るような目でレオンを睨み付けていた

レオン「俺は…警官だ…よく今まで無事だったな。」

キャサリン「当然でしょ…

愛するベンを助けるまで死ぬわけにはいかないわ！！」

レオン「ベン…ってあいつか…困ったな…なんと言えよ…。」

キャサリンの言うベンという男に心当たりがあるレオン…

数時間前…留置所で彼と会話したレオンだったが…
よくわからないうちに何かに捻りつぶされてしまった

そのことを何と伝えれば良いのか悩むレオン…

キャサリン「何よっ、あなたベンの事を知ってるの！？」

レオン「彼は…残念だが手遅れだ…。」

キャサリン「えっ…うそ…そんなことっ…!？」

レオン「俺が最期を見届けた…

おそらく…苦しむことなく逝けたと思う……。」

キャサリン「そんな…ベンが…あああああっ!!？」

レオン「…おい、ちょっと…どこへいくんだっ!？」

ベンが死んだという言葉聞き泣き叫び走り出したキャサリン…

レオン「…放っておくわけにもいかないしな…

まったく…女ってやつは…。」

悲しみに耐え切れずただ走り続けるキャサリン…

大声で泣き叫ぶ声は署内に響き渡り…

当然、その声はゾンビ達の注意を引くことになる

キャサリン「もうおしまいよ…彼がいなきゃ生きていけない…

もうどうにでもして…っ!？」

いつも市長である父親のことや

アンブレラとの関係をしつこく聞いてくる最愛のベン…

彼を失い力なく倒れ込んだキャサリン…

だが…その周囲には…何体ものゾンビが迫りつつあった

キャサリン「いやあああああっっ!？」



あああっ!!
そんな…激しくしないでっ…
ああっ…ベン…ごめんなさいっ…!!

キャサリンの薄手の服を引き裂き肉棒を
秘部へと挿入させたゾンビ…

キャサリン「あああああっ!?
なんなのっ…離しなさいっ!!」

悲しみに暮れていたはずのキャサリンだったが
両足をバタ突かせ
その悲しみを紛らすためか…暴れまわっていた…

キャサリン「あああああああっ!???'」

しかし…激しく肉棒で突きあげられると…
全身に電気が走り…体から力が抜けていく…

キャサリン「何なのよ…この感覚っ…
ああああっ…これ…ベンよりすごいっ…!？」

キャサリンはベンと愛し合った時の事を思い出していた…
セックスするたびに「記念に」と事後の姿を撮影された日々と…
父と激しく言い争っているベンの姿…

しかし今、そんな思い出さえ消し飛ばすほどの快楽が
キャサリンの体を支配していた…

ゾンビの激しい攻めに困惑するキャサリン
全身で感じる快楽が彼女を魅了していくようであった

キャサリン「ああっああっ…だめえっ!????」

喘ぎ悶えるキャサリン…

ゾンビの肉棒が脈打ち彼女の膣内で射精を開始した

キャサリン「あっ…中にっ…出しちゃだめええっ!？」



大量の射精に悶えるキャサリン...

しかしゾンビは腰の動きを休めようとはせず
さらに激しくキャサリンの体を突きあげた...

キャサリン「ああっ...そんなっ...壊れちゃうっ...
そんな激しくされたらっ!？」

さらにゾンビとのセックスが続くかと思われた...
その時...

銃声が響き渡り…

キャサリンの周囲に集まったゾンビ達が次々に倒れていった…

キャサリン「……あ…あなたっ…！？」

そこには銃を構えたレオンの姿があった…

その姿はキャサリンにとって神々しく見え…
まさに市長令嬢を救いに来た王子に見えていた

レオン「だ…大丈夫か…！？」

ほぼ全裸の姿となったキャサリンから視線を反らし
自分のジャケットをそっと差し出すレオン…

キャサリン「ああ…助けに来てくれたのですね…
私のことを…危険を顧みず…。」

レオン「…あ…ああ、放っておくわけにはいかないからな…。」

キャサリンのレオンを見る目は完全に変わっていた
不審者を見るような視線から
恋焦がれる乙女の目へと変貌していた

レオン「とにかく…ここは危険だ…
俺と一緒に来い…必ず守ってみせる。」

キャサリン「はい、どこまでもついていきますっ！」

レオンへとべったりと密着し歩き出したキャサリン

レオン「…あの…歩きにくいんだが…。」

キャサリン「仕方ないですわ…私襲われたばかりですもの！」

レオン「そうだが…ところで君の名前は…？」

キャサリン「キャサリン・ウォーレン…市長の娘ですわ。」

レオン「そ…それは失礼しました…っ！？

レオン・ケネディと申します…！」

相手が市長令嬢であることを知り委縮してしまうレオン

キャサリン「良い名前ですね…！」

さあ、私を守って…街から連れだしてください！

レオン！！」

レオン「…はっ…はいっ…。」

キャサリンを連れ地下へと向かい歩き出したレオン

暗闇に包まれた地下へと続く通路は…

この先、想像を超えた苦労が待っていることを

予見するようであった

レオン「まずは…クレア達を探しにいきます…。」

キャサリン「クレア…？誰その下品な名前の女はっ！？」

レオン「えっ…あの…そんな言い方は…。」

レオンの口から洩れるのはため息ばかりであった

END

to be continued

いやああっ!!
ゾンビに…こんなことされるなんてっ!!
うっ…ああああああっダメェ!!

キ


ズク

ズク





あはああっ!!
いやっ…中につ…出てるっ!!



うああああっ!!
また中に…出てる…
ダメ…こんなに出されたら…
妊娠しちゃう…

カッカッ

いやああっ!?
何なのこれはっ!?
ダメっ…奥まで入ってきてるっ!?
そんなに激しくされたら…あああっ!

ズ
ズ
ズ

ズ
ズ
ズ





なっ…なんなのコイツっ!!
ああっ!!
そんないきなり挿れるなんて…っ
ダメ…激しすぎてっ…!!

グッ

ズッ

ズッ



あがつ...イクっ...
中にたくさん出てるっ
いやっ...これ以上はダメえっ!!

バキバキ

びしょ

びしょ

うぐっ…!?
まさか…私がこんな…
こんな目に合うなんて…
うあっ…なんなの…
こんな太くて…激しいなんて…!?

ハッ
ハッ

ハッ
ハッ
ハッ





トク
トク
トク

トク
トク
トク

ピ
パ
ア
ア
ア

トク
トク
トク

待ってっ…そんな大きいの入らないっ!?
あああっ!?
そんな…ダメ…奥に当たってっ…!!

ズンズン

ズンズン

ズン

あはああっ!!
お腹が…っ精液でたくさんっ…
もっ…もっ…もっ…と中に出してええっ!!

クッ
クッ

クッ
クッ

クッ
クッ

ピ
ッ
ッ
ッ
ッ
ッ



あはあっんっ!!
ダメ…そこは…2本同時なんてっ!!
うぐっ…奥にまで…入ってきてるっ!?

ズッ

ズッ

ズッ

ズッ

あがあつ!!
また...イっちゃう...
おねがいっ...これ以上は...耐えられないっ!!
あはあああつ!!

ケケケケ

アゲアゲ

アゲアゲ



いやああっ!!
なにっ…中に入ってきてるっ!
クレアっ…ああああっ!!





ふああああっ!!
もらしちゃった...っ!
体がっ熱いよっ...ダメ
そんな奥に入ってきたらっ!!
あはああああん!
体の中に...何かでてるよおっ...



うぐっ!!
この感覚…あの時と同じっ…
いやっまたあの日みたいに
犯されるなんてっ…!!



カッ カッ

ズンズン

ピャアアア

ズンズン

あぐっ…あはあああっ!!
だめ…奥に出てるっ!!
体が熱くて…
おかしくなっちゃうっ!!

ああっ…ダメっ!
そっちはお尻っ…ううっ!?
なんで…こんな気持ちいいの…!?

ズ
チ
ズ

ズ
チ
ズ

ズ
チ
ズ





ひああっ!!
すごい...中に出てるっ...!!
もっと...もっと
私の中に...たくさん精液出してっ...!!

ハッ
ハッ

ハッ
ハッ

ハッ

ハッ

ハッ

ハッ



シャワー

シャワー

あああああつ!!
すごい...きもちいいよおつ...!!
もっと...きもちよくしてええつ...!!

あがつ…あああつああ!?
お腹の中に…入ってきてるっ…
ああ…もつと
私を孕ませてくださいつ!!

ズ
ズ
ズ
ズ
ズ

カ
カ
カ

ズ
ズ

ズ
ズ



んぐっ!?
あがつ...あはあああああつ!?

ズ
ズ
ズ

ズ
ズ
ズ

ズ
ズ
ズ

んぐっ

んぐ

んぐ



なっ：なんなのコイツ：！？
いきなり挿れてくるなんて…
ああっ：気持ちよすぎてっ…
抵抗できないっ…！！

ズン
ズン

ズン

ズン



あああつあつ!!
もつと出してえつ!!
もつと私を:
気持ちよくさせてっ...!?

ポカポカ

ジュジュ

ジュジュ



アハハハ

アハハハ

ズズズ

ああああんっ!!
こんな…感覚はじめてよっ!!
もう好きにして…!!
私を孕ませてっ!!



カキカキ

あああああつ!!
うっ…おなががつ!!
はああああんっ!!

ゴキウ

ゴキウ

ゴキウ



あああっ!!
そんな…激しくしないでっ…
ああっ…ベン…ごめんなさいっ…!!

あはあつ...!!
私の...体が...
なんでこんなに気持ちいいのっ...!!
あああつ...もつと...私を犯してください...!!

アハハ

アハハ











































































































































































































